

ショートメッセージ

2022年8月14日(日)「平和を実現する人々」

暗唱聖句: 平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。(マタイ5:9)

本日の箇所を含む、「〇〇な人は幸いである」と語られる一連の御言葉を、「八福の教え」という言葉で覚えている方もいらっしゃるでしょう。イエスさまが様々な教えを語られた山上の説教の、冒頭にこの「八福の教え」が登場します。

山上の説教はこの他にも印象深い教えがたくさん含まれますので、イエスさまの伝道においても終盤に語られたようにイメージしても不思議ではありませんが、実際にはほとんど最初期に語られています。マタイの3章でイエスさまがバプテスマを受けられ、4章で悪魔の誘惑に遭い、伝道を開始し、ペトロらを弟子とします。そして、5章から7章が丸ごと山上の説教となります。つまり福音書の中で最初に、イエスさまが群衆に語られた場面として出てくるのが山上の説教なのです。

ただし、直前の4章23節には、「**イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。**」と、何故かあっさりまとめられています。山上の説教以前にも、伝道や癒しの御業を大いにされていたことが分かります。その結果イエスさまのうわさが広まり、各地から群衆が集まったので、高いところに登って皆に向けて語り始めたのです。

さて、「八福の教え」において、3, 4, 6, 10節は人間の目から見てネガティブなことを挙げ、「幸いである」と語られています。人間の価値観と、神の価値観の相違がはっきりと浮かび上がります。一方で5, 7, 8, 9節はそもそもポジティブな事柄なので「幸いである」と言われても驚きはしません。ただ、なぜ幸いと言えるのかは、道徳的な視点ではなく、神の視点によりますので、安易に「そりゃそうだよな」と思わず、そこに込められた教えに思いを馳せたいところです。

「**平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。**」という御言葉は、有難みと重みが同居しているようにも思えます。たとえば、「その人たちは神の弟子と呼ばれる」とか「その人たちは神が褒めてくださる」ぐらいであれば、こうはなりません。「神の子」と言う言葉が、有難くも、引っかかるのです。

福音書において、「神の子」という言葉はイエスさまご自身を指すのが大原則ですから、私たちにその言葉が適用されることには違和感があるでしょう。例外的に、ヨハネ11章において、ファリサイ派の人々がイエスさまの命を奪う相談をしている時に、このような記述が出てきます。

「**これは、カイアファが自分の考えから話したのではない。その年の大祭司であったので預言して、イエスが国民のために死ぬ、と言ったのである。国民のためばかりでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死ぬ、と言ったのである。**」

カイアファとはこの時の大祭司で、イエスさまを信じる人が増えれば、ローマ人に攻められ国が減りかねないので、それなら一人の人＝イエスさまが死ぬ方がよい、と語った人物です。そしてその考えは預言によるものだとして記述されています。この中で出てくる「神の子」は明らかに、イエスさまではなく信徒の群れを指しています。

また、ローマ書ではパウロがこのように語っています。

「**あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。**」

イエスさまが遣わしてくださった聖霊により、私たちは神の子とされ、神さまを「父」とする関係性が与えられたのです。そもそも、山上の説教の中でもイエスさまはいわゆる「主の祈り」を私たちに教えてくださり、神さまを「父」と呼ぶことを勧めています。イエスさまが仲立ちしてくださる、私たちと神さまの関係は正に親子のような、温かみのある関係性であることを思えば、「神の子」という言葉に過度に委縮する必要はないのです。

山上の説教の中で、イエスさまは「腹を立ててはならない」「復讐してはならない」「敵を愛しなさい」など、「平和」に紐づく教えを多く語られています。人間同士が引き起こす諍い、不和、そこから生まれる憎しみや怒りに対し、イエスさまが深く悲しまれていたことが分かります。

この中でも特に「敵を愛しなさい」は印象深く私たちの胸に迫ります。怒りや憎しみに自身が染まった時、相手愛することがいかに困難であるか、誰もが知っているからです。だからこそ、私たちにはこの教えを「難しいよね・・・」「難しいけど、まあ頑張ってみよう」ということで終わらせず、必ず実現しようという強い決意と祈りが必要です。イエスさまは、「**敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。**（5：45）」と語られています。八福の教えと紐づけるならば、「敵を愛すること」は「平和を実現すること」であり、それによって私たちは「神の子（天の父の子）」と呼ばれるにふさわしい者となるのです。

45節の後半には「**父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。**」とあります。私たちは自分の価値観で善悪を判断し、悪人が何か痛い思いをすることを願いがちです。しかし、神さまのスケールにおいては、私たちが悪と思う人であっても、「すべて善しとされた」被造物の一つであり、等しく恵みを注ぐ対象なのです。

誰かを「敵」と見なし、怒りや憎しみを感ずると、相手を人間扱いしなくなるように思います。特に昨今はインターネットを通して、自分と異なる考え方をする人に攻撃的な言葉を投げやすくなりました。誰かを憎むことによる仲間づくりが安易に行われ、その機運を自身の支持に利用する政治家もいるほどです。イエスさまの言葉に従い、どのような人も主によって命を与えられ、変わらず陽や雨が降り注がれる存在だという視点に立つことは、「平和を実現する者」に近づく第一歩です。

神さまの願われる平和は、みんなが同じ色になるのではなく、様々な考え方、それぞれの色がある世界において、互いに認め合い愛し合うという平和です。争いの種があちこちにある難しい世界に私たちは生かされていますが、この地で伝道の業を託された者としての誇りと感謝をもって、平和の実現を成し遂げていきましょう。

#### ● 分かち合い

- ・ ノンクリスチャンの方も含めて言われる、一般的な意味での「平和」と、御言葉に立って目指す「平和」には、何か違いがあると思われませんか。
- ・ クリスチャンとして平和を実現していこうと願う時に、特に大切にすべきことは何だと思われませんか。

(担当：K.G.)



ショートメッセージは、教会ホームページから動画でも視聴できます。

左のQRコードを読み込むか、スマホ・PCからご覧の方は[こちら](#)をクリックしてください。

公開：8月11日（木）～